



## リレー随想

## 「つくば」を日本の一大ジェネリックタウンに

日本ジェネリック株式会社  
代表取締役社長 三津原 博

今回は、当社の製造拠点がある茨城県のつくば市(つくば)についてお話しすることにする。

つくばという土地に抱くイメージといえば、日本百名山の一つである名峰・筑波山や昔ながらの田園風景といった自然の豊かさもあり、一方では、1985年に開催されたつくば科学万博や筑波大学やJAXA(宇宙航空研究開発機構)がある研究学園都市として日本の最先端分野のイメージも有している。関東地方の一都市でありながら全国的に有名な都市として知れ渡る稀有な存在だ。自然と最先端技術が共存するこの土地が私は好きだ。



つくばの歴史を少し紐解くと、ご存じのとおり、水戸徳川家は徳川御三家の一つであり、関ヶ原の戦い後に佐竹家に代わって水戸藩を治めた。この水戸藩では昔から医学が研究されており、本間玄調という藩医が『薬室雑識』を書いた。この書には自分が担当した患者の住所・氏名・症状・診断・施術・施薬・術後などを記し、現在のカルテに相当するものになる(石島弘『水戸藩医学史』)。この地と医薬に密接な関係があったことは興味深い。

また1864年に筑波山に挙兵した天狗党員によって、天狗党の乱が引き起こされた。これは、藤田小四郎藩士ら約60名が、「尊王攘夷」を旗印として掲げて筑波山に挙兵し、幕府は天狗党追討の方針を固め、争乱が始まる。この争乱により水戸藩内の多くの優秀な人材を消失してしまったことは残念であるが、水戸藩士が尊王攘夷論を全国に広めるような維新的な藩士を多く輩出し、明治維新の胎動とも思える新しい志を受け入れる地域だったようだ。

時代が変わり昭和に入ると、1960年代、科学技術振興・高等教育の充実・東京の過密対策の国家プロジェクトとして、つくばの地に筑波研究学園都市が建設

された。人口約 20 万人弱、国、民間合わせて約 300 に及ぶ研究機関・企業、約 1 万人以上の研究者を擁するわが国最大の研究開発拠点が誕生した。

さて当社とつくばの接点となったのが、当社が誕生して間もない 2007 年。当社の研究開発拠点・医薬研究所を開設するところから始まった。つくば市の南部、観音台に開設した。翌年には、自社によるジェネリック医薬品の生産工場を建設することになり、同じつくば市の北部、筑波山の麓に位置する筑波北部工業団地内の外資系医薬品メーカーの旧研究所に白羽の矢が立った。そこは緑豊かで、広々としたスペースがあり、当社の製品生産に適した場所だと直感した。以来、自社製品の製造を行う「日本ジェネリックつくば工場」と名付けて、既存の建物を最大限活用しながら、かつ最新鋭の製造設備を導入した新しいタイプのジェネリック医薬品工場が誕生したのだった。つくば工場は順次、生産能力を高めて、現在では年間 23 億錠の製造能力を持つ当社の基幹工場に成長している。

そして今、私の最大の楽しみは、現在のつくば工場近くに来年 4 月完成予定で建設を進めているつくば第二工場だ。このつくば第二工場は敷地面積が約 13,000 m<sup>2</sup>、延べ床面積としては約 31,000 m<sup>2</sup>、製造能力は年間 100 億錠を可能とする大型工場となり、当社のジェネリック医薬品製造の中心的な役割を果たすことになる。現在のつくば工場と第二工場との両拠点のフル生産が始まり、さらに医薬研究所も観音台から同じ団地内に移転する予定だ。そうなれば、おそらくつくば市は日本で有数の一大ジェネリックタウンになるだろう。

こうして私は、四季を通じてこの地を訪れることになったが、四季折々の自然の美しさが大変印象深い。春はソメイヨシノが咲き誇り、夏には緑濃く、秋にはイチョウの街路樹が黄金色に光輝き、冬には筑波おろしが吹き降りてピーンと張り詰めた冷気で静寂をつくりだす。こうした自然もつくばの魅力だと感じる。そのつくばの美しい自然に囲まれて、優れた医薬品を製造・共有し、これからも患者さまや医療従事者のニーズに応える企業でありたいと心から感じる。